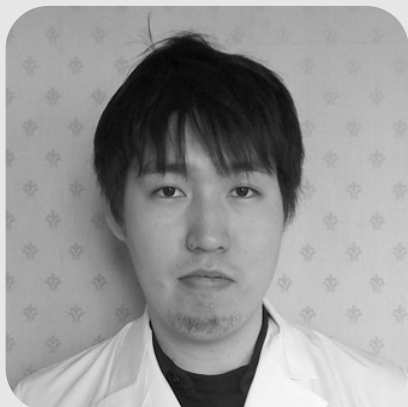


## アメリカの臨床現場



整形外科 かわもと とよひろ  
河本豊広先生

昨年4月から月曜日午前中の整形外科外来を担当させて頂いています。川崎医科大学の河本豊広(かわもと とよひろ)と申します。昭和59年生まれで、今年で医師になって5年目になるろうとしております。

私は大阪の豊中出身で、万博公園が近くにある町で育ち、今年J2に降格してしまいました。ガンバ大阪の試合には学生の頃からよく観戦しに行きました。今年岡山との試合があると思いますので楽しみです。

自分は、専門というものがないため、この原稿のお話を頂いた時に驚きましたが、ありがたく自由に書かせて頂きます。

私が整形外科医になりたいと考えたのは、中学3年生の2月に友達と遊んでいたところ、2階からコンクリートに落下してしまい、両手の骨と膝と鼻の骨を折り救急車で運ばれ手術をしました。多少の手の関節の拘縮は残っていますが、嬉しいことに現段階で手術をしていて不憫に感じたことはありません。そのような経緯で整形外科に興味を持ち、医師を目指しました。

ここで、研修医2年目の時にアメリカのシカゴに短期留学に行っていたのでその時の話をさせて頂きます。短期留学先はラッシュ大学といい、海外ドラマのERシリーズの舞台になっている病院です。アメリカに研究留学される先生は多いですが、自分は臨床現場の勉強をしに行ったので、ほぼオペ室や外来、病棟にいるという貴重な経験をさせて頂きました。インターネットで検索して頂ければ分かるのですが、アメリカの臨床医師は給料が日本の医師の2~3倍以上は当たり前で、平均年収がオバマ大統領より高いそうです。

もちろん、良い事ばかりではなく、アメリカでは医師が日本に比べ満ち足りているので病院への就職競争率が高いし、専門

医試験のノルマが高かったり、何より訴訟が多いとのことでした。実際、『次の患者はクレイジーなんだよ』と1日に3回は聞きました。あえて、実際はどうだったのかは失礼なので書きませんが、それぐらい注意しているということだと思います。

それを差し引いても、『患者になるなら日本、医者になるならアメリカ』という神話はあながち間違いではないなとも感じました。そして、医学の勉強をする上で、やっぱり英語は大事だなと思いました。ちなみにアメリカの先生にドイツ語などは話せるか聞いてみたところ、得意気に『医学は英語だけで十分なのだよ』と言っていました。アメリカ人らしいなと思いました。

話はかなり脱線致しましたが、今後とも他科の先生方やスタッフの皆様にはご迷惑をおかけするかもしれませんが、患者さんのために正しい努力をしたいと考えておりますので、どうぞご指導のほど、宜しくお願い致します。

河本先生は毎週月曜午前の整形外科外来を担当されています。

Doctor's Eyes